



暮らしプラス 西日本新聞

夕刊

発行所 西日本新聞社 〒810-8721 福岡市中央区天神1丁目4番1号 ©西日本新聞社2013年 ☎092(711)5555(代) 2013年(平成25年)11月25日(月曜日)

ガラケー捨てたもんじゃない

電話、メール使いやすく

通信料割安、電池長持ち

国内で独自の進化を遂げたことから、ガラパゴス諸島の動植物になぞらえてガラパゴス携帯、略して「ガラケー」と呼ばれる従来の携帯電話を再評価する動きが広がっている。スマートフォン(スマホ)の普及に押され絶滅寸前かと思いきや、その人気は底堅い。携帯大手3社は、今秋もガラケーの新モデルを発表。あの半沢直樹もガラケーを使っていた。逆襲が始まるのか。

「職場にパソコンもタブレット端末もある。毎月6千〜7千円の通信費を払ってまで、わざわざ画面が小さくて見にくいスマホを使う必要はない」。福岡市西区の歯科院長、小川明広さん(40)は10月、約2年使ったスマホを解約してガラケーの契約に戻した。

「誰かと連絡を取るのにはメールと電話で十分。フェイスブックやLINE(無料通信アプリ)を使う必要も感じない」。ガラケー一筋十数年という矢嶋敏朗さん(51)は語る。勤め先の日本旅行(東京)で広報を担当し、外部の人とやりとりすることは多いが「ガラケーで不便はない」。今でもガラケーはスマホより契約件数が多い。民間調査会社のMM総研(東京)によると、9月末時点の携帯電話端末の契約数は1億1900万件。うちガラケーは6900万件で6割程度を占める。

なぜ、支持されるのか。MM総研のアナリスト篠崎忠征さんは、使いやすさ、機能のシンプルさに加え、リーズナブルな料金を挙げている。料金プランは複雑で単純比較は難しいが「スマホを使うとネット利用が多くなりがちで、通信料は一般的にガラケーより高い」。

「スマホ男子」よりもてる？

バッテリーの持ちが良いのもガラケーの利点だ。法人契約にも強い。「企業側は電話とメールの機能があれば十分という考えが支配的(篠崎さん)。高視聴率ドラマ「半沢直樹」の主人公も仕事ではガラケー、私用はスマホと使い分けていた。出荷台数はガラケーが年間1千万台、スマホが3千万台と開きがあり、MM総研は来年度中に両者の契約数が逆転すると予測。「今の対応は市場動向を見極めて検討する」とするKDDI(au)。

「デジタルフリー奨励金制度」を7月から始めた。岩田伸総務部長は「スマホは休憩時間などに没頭してしまいがち。社員同士のコミュニケーションや、仕事の集中力を阻害する要因になっていた」と語る。社員90人のうち、20人が制度を利用。昼食時の利用自粛も呼び掛けており、岩田部長は「社員同士の意見交換や理解の深まりが、将来的な会社の競争力向上につながる」と期待する。

同社の木村かおるEC事業部長は「鉄道利用が多い都市部では、移動中にネットを見られるスマホの利用者が多いが、車移動中心の地方や郊外ではスマホの必要性が薄い」と説明する。ガラケーを使い続ける男性を指す「ガラケー男子」なる言葉も登場した。ネット上では「ガラケー男子は女性にもてる」との説も。ITライターの池田園子さんは女心をこう読み解く。「スマホ男子の中にはフェイスブックやゲームなど、移動中や食事中でも携帯をいじっている人がいるが、ガラケー男子は目の前の相手を大事にしなくていい」。



ガラケーを使い続ける人たちは確実にいる

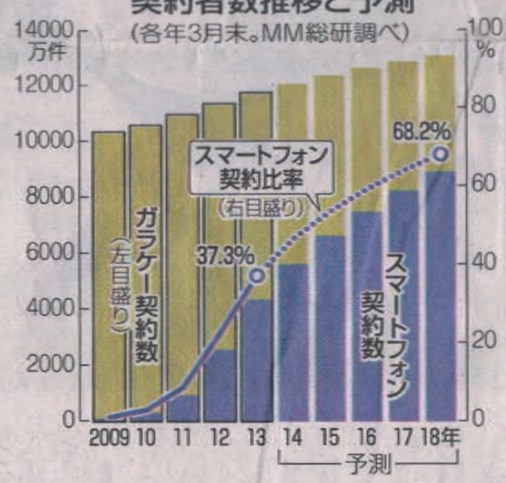
ガラケーとスマホ

ガラケーと呼ばれる携帯電話が数字や文字の入力ボタンが液晶画面と別々に配置されているのに対し、スマートフォン(多機能携帯電話)は画面を指先で触れて操作するタッチパネル方式が特徴だ。代金支払い機能「おサイフケータイ」など独自の機能を持つ日本のガラケーだが、その多くは世界標準になれなかった。

ガラパゴスは、南米エクアドル沖の太平洋に浮かぶ世界遺産の島々で、ゾウガメなどの生物が独特の進化をした。携帯以外でも、世界の流れと懸け離れることをやめて「ガラパゴス化する」と言ったりする。

ワードBOX

ガラケーとスマホの契約者数推移と予測 (各年3月末、MM総研調べ)



「秋葉原ラジオストアー」閉館へ3面

ガーデニング教室5面